8 漢方診断学

はじめに

漢方医学における診断とは，五感による漢方医学独特の理学的診断法を駆使して，個々の患者の病因・病機を把握することである。診断の総合所見を「証」という。証は西洋医学的病名ではなく，漢方医学的病態を意味する用語である。

診察は，望診・聞診・問診・切診の４つの方法を用いて行う。これを「四診」という。四診は古代より用いられている伝統的な診察法で，すでに『難経』に「望んで之を知るを神と謂い，聞いて之を知るを聖と謂い，問うて之を知るを工と謂い，脈を切して之を知るを巧と謂う」という記載がある。

望診は視覚による診察法で，全身や局所の状況のほか，分泌物や排泄物の性状をも観察する。聞診は聴覚と嗅覚による診察法で，言語・呼吸・咳嗽など患者から発せられる音声と身体や排泄物の臭気を観察する。問診は患者の述べるところによって病態を把握する診察法で，病歴を聴取し，現在の病状を尋ねる。切診は触覚による診察法で，脈象・腹証をみるほか，身体各部を触診する。

臨床上は，これら四診の所見を総合して病態を分析し，病因・病機を把握して診断にいたる。

望診

視覚による診察法である。「神」の状態・身体全体の形体や動作・身体各所の状況・分泌物や排泄物の性状・舌の所見などをみる。

1 「神」の望診

「神」とは，病人の意識状態・表情・顔色・眼光・動作・刺激に対する反応など，生理的・病理的に外面に現れる人体の生命活動の総称である。上述の神に異常のないものは「得神」といい，異常のあるものは「失神」という。神は正気の状態を反映しており，得神であれば，たとえ表面的な病状がかなり重くても，治療によって軽快しやすい。また，病状が重いにもかかわらず，一見軽快したようにみえるものを「仮神」という。

2 全体的な形態の望診

病人の体の強弱肥痩・姿勢・活動の状態を視診によって観察し，発育の良・不良，体質の強壮・虚弱などをみる。太っているのに色白で，少し動くと息切れし，元気がないのは陽気不足，あるいは痰湿が内生しやすい体質に多い。痩せており，皮膚色の悪いものは陰液や血の不足，あるいは火が熾盛になりやすい体質に多い。また外感病で，激しい悪寒のある場合は戦慄を現し，少陰虚寒証ではウトウトと眠りがちになる。四肢の振戦は内風（肝風内動）にみられる。

3 顔色の望診

『霊枢』邪気臓腑病形篇に「十二経脈，三百六十五絡，其の血気は皆面に上り，而して空竅に走」るとあり，人体の気血の盛衰が顔面に現れることを述べている。したがって，顔面を望診することは全身の気血の状態を知ることにつながる。

正常人の顔色は，（人種によって違うが）微黄で紅潤を帯び，やや光沢がある。疾病に陥ると顔色にもさまざまな変化が生じる。

顔面が白色であるのは虚証・寒証を示唆する。顔色が光ったように白く浮腫状のものは陽気の虚が多い。淡白で艶がなく，やつれた感じのものは血虚が多い。また風寒を外感して悪寒戦慄しているときや，裏寒による激しい腹痛のときには，顔面蒼白を呈する。

青紫色であるのは，風寒・瘀血・疼痛・気閉を示唆する。例えば，顔面が青く灰色を帯び，口唇が青紫色を呈するのは，瘀血のために気血が停滞したのである。

紅色であるのは，主に熱証を示唆する。例えば，裏に実熱があれば顔面紅潮が現れる。陰虚火旺の虚熱の場合は，午後に両頬部に紅潮をみる。

黄色であるのは，湿証や虚証を示唆する。例えば，肝胆湿熱では黄疸を呈する。強度の貧血の場合にみられる，しおれたような黄色を「萎黄」という。

黒色であるのは，腎虚や瘀血の存在を示唆する。

4 身体各部位の望診

眼の結膜が充血して赤いものは，風熱を外感したか心肝火旺にみられる。眼球結膜の黄染（黄疸）は，鮮明であれば湿熱，晦暗であれば寒湿である。眼球突出は，痰鬱木火熾盛によることが多い。

外感病で鼻翼が煽動するのは，多くは風熱邪が肺を壅遏している。

口唇の色が淡白なのは気血両虚に，深紅なのは血熱に，暗青なのは寒邪内盛あるいは肝気鬱滞に，暗紫なのは血瘀にみられる。ただし臨床上，上下の口唇に色の差のあることも少なくないので，他の四診所見を参考にして分析する。口唇の乾燥は傷津で，口唇びらんは火熱熾盛でみられる。

皮膚の望診では，色沢・潤燥などの一般的事項の他，発疹・腫脹（浮腫など）・癰疽などの病的所見を観察する。皮膚色が淡白・蒼白であるのは気血の虚弱の場合にみられる。皮膚が乾燥して粗造なのは陰虚血燥にみられる。

皮膚の発疹にはさまざまなものがあるが，それぞれ漢方医学的に意味をもっている。紅色の丘疹は多くは熱に属し，白色の丘疹は風寒あるいは風湿が腠理を鬱閉したものによく現れ，暗紅色のものは血瘀が疑われる。苔癬化を来したものは脾虚湿盛に多い。

紅色の小水疱は多くは湿熱に属し，大水疱は多くは湿毒あるいは毒熱に属する。深在性の小水疱は多くは脾虚で湿を代謝できないか，あるいは寒湿に属する。膿疱で水疱から変化したものは湿毒凝結したものであり，最初から膿疱を形成するものは毒熱が浸淫して生じたものに多い。結節のうち赤みを帯びたものは多くは血瘀に属し，皮膚色が正常なものは気滞や寒湿凝滞あるいは痰核に属する。

発疹の部位が，ある経絡や皮部に沿って出現しているものは，それに対応する六経の病変と関連していることが多い。

発疹の局面が湿潤していれば湿や湿熱の存在が，発赤していれば熱や湿熱の存在が疑われる。引っ掻いて血の出るものは病変が血分にあり，浸出液の出るものは気分にあることを示唆している。乾燥して粗造なものは，津液や血が不足して皮膚が滋潤を失ったためである（特に老人の場合）ことが多いが，湿熱などの病邪の存在によって，気や血や津液が表に到達できずに生じていることもある。

5 分泌物・排泄物の望診

①鼻汁

鼻閉とともに希薄な鼻汁が出るのは，肺の宣散が障害されたのである。多くは風邪あるいは風寒邪の侵襲による。なお，感冒で当初希薄な鼻汁が黄色粘稠に変化するのは治癒傾向にある。黄色で臭気を伴う混濁した鼻汁が持続するのは，熱邪が関与している。

②喀痰

白色で希薄な痰は，寒邪が侵襲したり陽気が虚衰したりして水湿が凝集することによって生じたものであり，黄色の痰，あるいは白色であっても粘稠な痰は，熱によって津液が煎熬されて生じたものである。膿状の痰でなまぐさい臭いを伴うものは，熱毒が肺に長時